

対
談



嘉名光市 (Koichi Kana)

大阪市立大学大学院 工学研究科都市系専攻 准教授

栗本智代 (Tomoyo Kurimoto)

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所 研究員

“まつり”から始まる、
地域でつながる仕組みづくり

大阪市立大学の嘉名光市氏は、まつりやイベントを通じた都市の再生や地域コミュニティづくりなどに、大阪を主なフィールドとして、実践的に取り組んでいる研究者。地域の歴史的資源の再生・活用のみならず、人々の間につながりを生み出し、新しい活力を地域にもたらし、まつりの意味と可能性について、具体的な事例をもとにお話をうかがいました。

まつりは地域を形づくる大きな背骨

栗本 今日新しいまつりについてのお話を中心に、伝統的なもの潜在的な力や意味合いが、今のまつりにどう生かされているのかなどについてもうかがいたいと思います。

嘉名 まつりというものには、それが行われる日だけでなく、その準備を通じたさまざまな人々の諸活動も含まれますよね。天神祭のように毎年やるものもあれば、諏訪大社の御柱祭は7年に1回、伊勢神宮の式年遷宮は20年に1回とか、サイクルもいろいろいる。まつりには、地域の文化を支える役割もありますし、そのプロセスすべてが都市やまちの大きな風物詩やブランド力にもつながっていきます。

栗本 都心の大きなまつりの場合、地元の関係者はそれに深く関与し、大勢のスタッフが参加しますが、それ以外の大多数の人たちは観客側になりがちです。もちろん、まつりの規模や形態によってかなりニュアンスが異なってくるのですが、地域の人それぞれがまつりにどう関わるのかは大切なポイントですね。

嘉名 私たちが関係している大阪の船場のまつりでもそうですね。私の専門は都市計画ですが、都市のクオリティや活力をいかにして高めていくのかを考えていくときには、エリアマネジメントの概念が重要になってきます。地域で何かをしようとする場合、提供側と受益側の区別が明確ではない関係性のもとで、さまざまな人が相互に自分のノウハウや力を提供しあって、ひとつのものがつくり上げられていくことになるわけです。地域のまつりは、まさにその実例として、とても大切な意味合いを持つてくると思います。

栗本 まずは相互的な関係を生み出すことが必要。地域のコミュニティをつくっていく手段としては、まつりは現代でも非常に有効なものだということですね。

嘉名 ええ。エリアマネジメントだとか、地域において互恵的、つまり相互に役割を担いながらやっていくことは何なのかをすつ

と考えていくと、実は近世の町衆のあり方に行き着くんです。彼らは自分たちで町を経営していたし、自分たちのお金でまつりも運営していた。その意味では、われわれは新しいことをやろうとしても、結局は伝統的なものに学ぶところが多いと最近よく感じます。

栗本 しっかりとした地域の関係性があったまつりがあるし、今度は地域力を強くするためにまつりが必要になる。

嘉名 結局まつりには、その地域を形づくる大きな背骨のような役割があるという気がしますね。

栗本 嘉名さんご自身、子どもの頃のまつりの思い出などはありますか。

嘉名 私は河内長野育ちで、小さい頃から、だんじりは身近でした。けれども住んでいたのはニュータウン。地車を持ってない地域だったので、大きな疎外感を感じて育ってきました(笑)。なんでもうちの町にはないんやろと。

栗本 それもあって現在の研究があるのかもしれませんが(笑)。伝統的なまつりの中で興味深い事例はありますか。

嘉名 都市計画の仲間で三重大学の先生がいるんですが、地元なので伊勢神宮の式年遷宮のプログラムに呼んでもらえる。式年遷宮は20年に1回ですが、実は20年サイクルで次々と行事をやる。その20年のプログラムをひと通り体験すると、いわば地元の町衆の仲間になるわけです。役木を川に流して運んでくることなどでも、そのプロセスを通じて、いろんな人たちが関わるのですが、そういう一定の期間をかけて地域を固めていくようなサイクルをもっていることに面白さを感じます。諏訪大社の御柱祭などもそうですね。

栗本 地域の伝統的な行事を通じて、歴史的資源の継承もするし、人材の育成と地域の環境づくりをする意味もある。

嘉名 伝統的なまつりは、地域にしてみれば、集客、風物詩としての魅力も大きいし、何より長く続いていることの秘訣がある。組織の問題もありますが、経済的な意味も含めて、回る仕組みがうまくできているのだと思います。行政などがスポンサーとしてやると、



市光名 嘉

その時はよくても継続性を考えると難しい。船場でも道修町にある神農さんのまつりは江戸時代から続いて、氏子さんの寄付などで運営されています。町衆の心意気でポンとお金を出して、見返りを求めないのもあるでしょうけれど、経済活動も含めて、何らかの形で投資分が回収される循環の仕組みが大事でしょう。長く続いていることは潰れなかったということです。この循環する仕組みは、実は都市づくり、またコミュニティの再生という点で、エリアマネジメントにおいても大いに参考にしなければいけないものです。

まつりコミュニティが支える地域の力

栗本 長野県飯田市の人形劇フェスタは、小さな商店街などを舞台にして町の空間をひとつの舞台に見立てて使っているのが印象的です。今は全国から開催時期にたくさん人がやってきます。回る仕組みでも、地方と都市では人の関わり方が違うと思いますが、地方ではコミュニティがまだ基盤としてある。

嘉名 私は10年ほど前から、鳥取県の智頭町に関わりだしたんですが、あのへんは人間の関係が濃いというか、地元の方と深夜までお酒を飲まないと仲良くなれない(笑)。実は、その智頭町では人形浄瑠璃をやっている。もともとは江戸時代に淡路からきた人たちが始めたんだそうですが、細々と村まつりの時にお披露目することで継承されてきたものなんです。まちおこしに関わり始めると、それがとても重要な資源であることに気づく。

栗本 村の中の住民だけで愉しむには、あまりにもつたいないと、考え始めたんですね。

嘉名 まちの独自性をもっと外に向けてPRしましょうとなる。それから、このあたりでは桃の節句の年中行事が復活してきています。雛人形を見ながらまちを巡る、智頭・備前街道「雛あらし」や、隣の内瀬町の「流しびな」も有名。今ではいろんなところでやっています。ここは割と早くに始めた。旧家にしっかり受け継がれている雛人形を雛祭りシーズンに一齐に飾りましょうと。これもすごく観光客が来るようになって広がりも出てきています。

栗本 古いコミュニティを生かした新しい試み。ただ、逆にそうしたことを嫌がる人もいるのでは。

嘉名 確かにそうですが、このままではコミュニティもだめになるという感覚を多くの人は共有しています。加えて、まちの良さをわかってもらいたいと。とはいえ、あまり大勢に押しかけられても対応に困る。そもそも駐車場がないとか、インフラの制約もある。運営にしても、地域だけでやっていくとか、今の組織体制では難しいので外からも関わってもらいたいとか、若い人が入ってくるとありがたいとか。試行錯誤を経て、結局、中庸に落ちついていく。

栗本 派手にやろうというタイプと、身の丈にあった規模で開催しようという考え方の差もありますね。

嘉名 去年の冬、長崎でランタンフェスティバルの話地元の人たちにききました。長崎は観光で有名ですが、このまつりは、もともとは経済界の人たちが、お客さんが減る時期にやりだしたんです。それが、おくんちの人たちと一緒にやるようになって定着してきたそうですね。伝統的なまつりと新しいまつりが連動しながら関係づけられているところは面白い。

栗本 以前、長崎を案内していただいた時、全く関係のない時期から、おくんちの日を指折り数えて楽しみにしている町の方々にお会いしました。

嘉名 実は、おくんちのコミュニティは、おくんち以外のことにはあ



栗本 智代

継承・継続・発展を掲げていました。ただ、2009年はシンボルイベントで大阪府・市・経済界からお金が出たけれど、「2010」は予算も少なく、このままではミニ集客イベントになってしまうと皆危機感を持っていました。そこで「2011」は新しい展開を考

栗本 小型船で人々が行き来した「大阪水辺バル」も、着眼が面白く

栗本 大阪に水都としての川や水辺のにぎわいを再創出しようという「水都大阪2009」というイベントが、2009年に開催され、昨春秋は「水都大阪フェス2011」として開催されました。嘉名さんも大きく関わられています。その試みの中で人の動き、コミュニティネットワークの形成の仕方などで特徴的なことはありましたか。
嘉名 最初に52日間にわたって展開された「水都大阪2009」も、

栗本 持続可能な形を目指して、自立性が高いものとしてプロジェクトの再構築に動きだしたのですね。
嘉名 何より次の時代の都市のあり方を考えていく上で、この機会を新しいトライアルの場にできないかということでした。そこで、「水辺のまちあそび、やってみたいを叶えよう」と、いろんな人が水辺でやりたいと思っていることを実際にやっちゃおうということ。主要な考え方にしました。例えば「北浜テラス」に臨時の船着場をおいた。それは、たくさん的小型船が行き交う水都を実現したいよね、という話から生まれました。それから公園での結婚式。中之島公園で結婚式をやる風景ががらりと変わる。東北で被災して関西に避難されている方の結婚式でした。お二人の知人・縁者に加え、公園にいる人が「結婚式や！」と集まって祝福した。本当にいい場になった。こういうことをやっていると都市は魅力的になるし、それが都市のブランド力につながる。そういう仕組みをつくっていければよいという考え方です。

「水都大阪」プロジェクトの再構築へ

まり興味がない(笑)。まつりコミュニティは、まつりの準備で年中忙しいわけです。だからランタンフェスティバルは独自に実行委員会をつくった。ただ、まつりというのと、おくんちの人たちもピクンとくるといふか、血が騒ぐということで協力している。
栗本 伝統的なコミュニティが新しいまつりをサポートする関係になっっているんですね。
嘉名 ライトアップでも、長崎らしくランタンでやろうとすると、相当たくさんの方が必要。そういう側面があるので地域の協力が欠かせない。町を回遊してもらおうということで、町の中全体でのイベントとして組み立てられていると思います。

えようと、事務局と私とかで勝手にあれこれ提案して、いろんな人に説明してまわって実現したという流れです。考え方の基本は、最初の「2009」でせっかく培ったネットワークをもう一度つなげていこうというものです。当時はたくさんの方々のサポートの方々に入っていただき、アーティストの方々にも手助けしてもらった。中之島の周辺をはじめ、あちこちの公園とか水辺の空間も含めて活用し、規制緩和を通じて可能になった大阪の川床「北浜テラス」とか、まち歩き「OSAKA旅めがね」とかの新しい取り組みがたくさん生まれました。それらを、もう一回つなげていく場が必要だと考えたわけです。それに、外からお金をもらい続けられないといけないイベントだったら、情勢が変わればなくなってしまう。もちろん「水都大阪」についてはまだ産声をあげたところですが、関わる人たちが知恵とお金と汗を出し合うような、自分たちでまつりを回していくような仕組みをつくらないといけない。



お酒が好きな人にも、たまらない魅力があったようで、非常に賑わっていました。

嘉名 チケット制で、それを1つの店で1枚ずつ使ってハシゴをする。だから普段行かない店にも立ち寄る。地域にしてみると、それまで馴染みのなかった人たちに、まちを歩いてもらえるわけです。お金は先払いでリスクも少ない。行政のお金でやる集客イベントではなく、地域の人たちがお金を出し合って回収する仕組み。結局90店舗が参加してくれました。今回はバル(酒場)の仕組みに船を交えたのが新しい。船が大人気です。と満席。その点は皆さんにご迷惑をかけたので、反省材料もあるんですが、思ったより喜んでいただけた。私も飲んでましたけど(笑)。

まつりを通して生み出す地域の好循環

栗本 船場のまつり「船場博覧会」も、昨年11月に開催された際には、いろんなものが集まって、以前よりコンテンツが増えましたね。

嘉名 プログラムが40くらい。来場者数は2千人ほどでした。今までより大規模になりましたね。「船場博覧会」という名前自体は船場地区H O P Eゾーン協議会がやってきたもので、うちの大学ではセミナーや街角コンサートを展開したりする「まちのコモンズ」を2008年からやっています。北船場ではその他にも動きは多数あって、それらをバラバラでやるよりも、一体的にやろうと、いろんなコンテンツを合体させた。屋外や近代建築を使ったコンサート、また高麗橋の吉兆での餅つきも大盛況。重要文化財の旧小西家住宅の改修工事に際して出てきたものの展示なども行いました。

栗本 チラシなどは手配りをして宣伝されたそうですね。

嘉名 当初からの伝統なんです。「まちのコモンズ」でお世話になった

高麗橋二丁目振興町会の会長が「手渡しで来てもらうことが大事」ということで、最初に2500枚のチラシを一軒ずつ配ったんです。マンションは結局ポストインでとったんですが、当時は地元の人を呼ぶことが主眼で、外から来てもらうことを重視してなかったのは確か。今は、時期も神農さんのまつりに合わせ、対外的にもたくさんの人に来てもらうこともよくなりました。

栗本 エリアはかなり広がったのですか。

嘉名 2008年は1町会。09年は3町会、10年は6町会でやりました。10年から実行委員会をつくって実施し、地元の人が主体になってきましたね。実行委員長も町会長です。

栗本 まつりを通して地域づくりを考えると、持続可能なまつりは、ある意味では持続可能なコミュニケーションにつながっていくと思えます。新しい住民の方の反応はどうでしょうか。うまく参加されていますか。

嘉名 実行委員会を立ち上げた時、高麗橋に面して立つタワーマンションの管理組合の理事長にも入っていただきました。入居者の多くは利便性でそのマンションを選んだ方々ですから、地域のことはよく知らない。一方、高麗橋は大坂城に通じる高札場があったところで船場の中でも格式が高いし、隣の北浜は三越百貨店、もとは三井呉服店があった場所で、まちの人たちは誇りを持っているわけです。最初はタワーマンション前にあるオープンスペースを活用させてほしいとお願いしたところからのお付き合いですが、声をかけると大歓迎で、まずはマンションの居住者で、例えばワインセミナーのようなものだったらマンションの中でしてよいとなった。さらに近くにある近代建築でもセミナーをして、次第にマンションの方々地域に入ってきて、いろんな人を巻き込んでいくアイデアや知恵をいただけるようになったんです。

栗本 この地域は、歴史的な資源が、ソフト・ハードともしっかりと残っていて、今の感覚で活用できる「遊び」の部分もあるので、楽

嘉名 光市 (かな・こういち)
 大阪市立大学大学院
 工学研究科都市系専攻 准教授

1968年生まれ。92年東京工業大学工学部社会工学科卒業。2001年同大学大学院社会理工学研究科社会工学専攻博士課程修了。工学博士。(株)UFJ総合研究所(現三菱UFJリサーチ&コンサルティング)都市・地域再生マネジメント室主任研究員から大阪市立大学大学院講師等を経て現職。主な研究テーマは、都市デザイン、都市再生計画、景観計画・計画論等。著者に『生活景-身近な景観価値の発見とまちづくり』(共著、学芸出版社)、『創造都市と社会包摂-文化多様性・市民知・まちづくり』(共著、水曜社)、『都市・まちづくり学入門』(共著、学芸出版社)など。

栗本 智代 (くりもと・ともよ)
 大阪ガス(株)
 エネルギー・文化研究所 研究員

1988年奈良女子大学家政学部生活経営学科卒業後、大阪ガス(株)に入社。91年より現職。大阪の活性化の一環で、都市の個性や魅力を、歴史や文化的側面から探求。「なにわの語りべ」公演活動も展開する。著書に『大阪まちブランド探訪』(創元社)、『大阪 水の都に浮かぶ劇場』(KBI出版)、『大阪力事典』(共編著、創元社)など。

しそうな雰囲気伝わってきます。

嘉名 北船場のまつりでは、今まではあまり関わりがなかった人たちが、興味、関心を持って出てきてくれた、いわば今が成長期。その一方で各地で多くのまつりが廃れつつあることも事実です。まつりの中でも、成長して生き残っていくまつりと、衰えて消えていくまつりに分かれていきます。

栗本 まつりの意味が問われますね。誰のための何のためのまつりか。特に、新しいまつりやイベントは立ち上がり当初の担い手や目的があつて始まり、少しずつ、まちに入り込んで、担い手が増えたり交代したりして趣旨も微妙に変わっていくながら、今この時に一番合った形で継続することが少なくないですね。

嘉名 北船場の高麗橋は夜間人口がほとんどいなくて、うちの大学は都心コミュニティの再生をテーマに都市計画的な意味を持って関わっていったんです。08、09年は基本的には企画も運営も大学がやりましたが、10年からは、実行委員会の一メンバーになりました。だんだんと後ろに下がっていき、いまや本当に地域のまつりになってきたと思います。その地域で持続可能な仕組みを構築しつつ、新しいことができる魅力的な場であることが、まつりの持つ面白さ。だけど、すでに今ある伝統的な枠組みの中で、それを革新的にやることは、地域の人にとってもちよつと難しいところがある。

栗本 むしろ、何も無いところに外からポンと入っていく方が、新しいことをやるかもしれないですね。

嘉名 そう。最初は町会長も「大学が言うんやったら協力したるか」という感じですが、やってみると吉兆の餅つきに300人くらいが集まってきたり、アジア音楽のコンサートを街角で開いたら人で溢れたり、まちの変化が目に見えてきた。

栗本 そうなると、まちの人も主体的にやっっていくこととなる。

嘉名 町会では、それをきっかけにして、毎月1回の定例のお掃除会が始まったそうです。隣のビル同士の人たちが、これまでは会話がなくて、コミュニケーションもなかったのが、まつりをやることでつながりはじめ、いっしょにまちのことを考えましょうかと。

栗本 地域の良い循環が生み出されてきた好例だと思います。今後への期待も大きいですね。今日はどうもありがとうございました。



「船場博覧会2011」パンフレットより